すべては一編の詩からはじまった

倉敷市　宍甘一彦

はじめに

以前から宍甘家の昔の様子を知りたいと思っていたこともあり、暇を見つけては”宍甘”を検索していた。そんなときヒットしたのがある古書店の在庫案内であった。その書は西大寺愛郷会が昭和４９年に刊行した「西大寺の城跡」というタイトルで、その目次にあった”宍甘城”の項目に惹かれ早速購入した。この書の購入をきっかけに宍甘家のルーツを探る旅がスタートする。

「西大寺の城跡」について

このコンテンツをご覧の方には言わずもがなであろうが、西大寺愛郷会は、昭和４８年４月８日に、岡山市西大寺地区内の「古き良きもの」を大切にするという趣旨のもとに、同士の者が集まって結成された。天満屋の創業者伊原木氏の本邸衣装蔵を改装して作られた西大寺文化資料館の運営母体でもある。後世に何かいいものを残そうと立案がなされ、昭和４８年といえば宇喜多直家が岡山開府して以来丁度４００年になるので、宇喜多の城に限らず地区内の城跡が実地踏査され、その結果が”西大寺の城跡”と題し、本として出版された。

さて、この“西大寺の城跡”の４６ページから宍甘城についての記述があるが、その中に、「一行は、山王山の山裾を西北に沿うて廻り、宍甘氏の墓地を訪ねた。」の一節がある。西大寺愛郷会の踏査隊はその墓碑銘の記述が“古都村史”のそれと一致することから宍甘宗仙の墓であることを確認している。宗仙については岡山大学附属図書館の池田家文庫に「宍甘氏奉公書」（５年ごとに行う業務報告書）が保管されており宍甘古庵から宍甘謙造まで数世代の記録が残っている。“古都村史”にも、「宍甘宗仙は当時岡山城下の屋敷に居住していたが、先祖代々の墓所のあるところに骨を埋葬したと考えられる。」とあり、筆者も山王山には宗仙一族の墓があるのだろうと想像した。しかしこれだけでは当家とのつながりは一切不明であった。ところが思いがけず大叔父より貴重な情報が寄せられる。

当家と山王山をつないだ詩（大叔父の手紙より）

「Ｍ子（大叔父の娘）が小学校３年生の正月、１月１日の新聞を開いて行くと東京の竹中郁という先生の選で一席に「朝のきり」３年宍甘Ｍ子と有り、家でも突然のことでビックリ。後日先生から『宍甘さんこんなものが来ましたよ』と封書を渡されました。差出人は古都村で町内会長をなさっていた羽原照太さん。赤い罫紙２枚に・・・（以下内容）

・古都村史の宍甘氏に関する記述
・先祖代々七代
　立石（宝永２年没）　宗達（　　）　宗得（元明４年没）　宗寒（文化１１年没）
　宗悟（安政３年没）　宗要（明治１１年没）　宗専（明治１９年没）

この先祖代々七代はいずれも当家の過去帳に記載のあるもので、没年も正確に記述している。羽原氏はいかにしてこの者達の名を知ったのか？山王山に墓碑が存在するのか？大叔父の手紙はさらにこう続く。

「この知らせを頂いたので早速羽原氏を尋ねて行った時、良い時季に来られた。夏は虫が飛んだり大変ですが・・・と。話し乍ら目的地に到達。なんと土地の人達によって綺麗に祀られており、東山の墓地より少し広いくらいの墓地で四方にぐるりとお墓が立っている。地水火風空の五輪墓が２基位と高さ一間以上の墓が４～５基。過去帳を書いたのは終戦後間もない頃で紙もない時代で障子紙に書いた記憶がある。その頭の中にあった宗悟・宗専・宗達の名が有った。」

大叔父の情報が確かだとすれば羽原氏に案内された場所には当家の墓碑があったことになる。筆者はこの情報を入手して以来、宗仙の墓所探しを行う。”西大寺の城跡”にある、「一行は、山王山の山裾をを西北に沿うて廻り、宍甘氏の墓地を訪ねた。」を頼りに。

西大寺愛郷会の協力

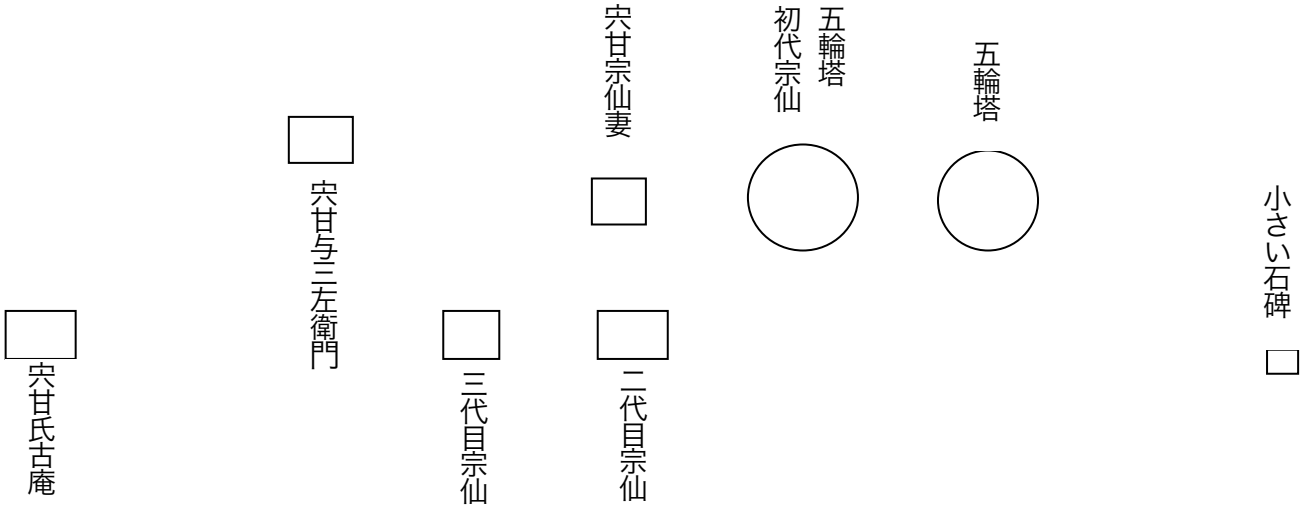
まず“西大寺の城跡”の編者である西大寺愛郷会への問い合わせを行った。しかし当時の踏査関係者はほとんどが鬼籍に入っており直接様子を伺うことは困難であった。父と共にここと思しき場所を訪れたり、愛郷会会員の藤井氏と共に山に分け入ったりしたが発見はできなかった。しかし藤井氏の地元ならびに関係当局への熱心な働きかけのおかげで、昭和４８年の踏査以来４２年ぶりに古都学区電子町内会の皆様を巻き込んでの現地再調査が行われることになった。

ついに発見！

２０１５年１２月１３日（日）午後１時、宍甘公会堂に於いて古都学区電子町内会の皆様とのミーティングのあとそれぞれが鋸、鎌を手に山に向かう。道案内をお願いしたのは地元の長老Ｋ氏。途中Ｋ氏と山の所有者Ｉ氏との５０年ぶりの感動の再会という演出も加わり、一行は山を登って行く。７０ｍほど登った時にＫ氏が山の内部を指差し「あの辺にあるから！」と言う。一行はそこから道を外れ、山の中に分け入って行く。雑木林を抜け、沢を渡りしばらく登ると、先頭集団の方から「あったよ！」と声が上がる。その声にみんなが色めき立ち先を急ぐ・・・。

墓は“西大寺の城跡”の記述通り大きな五輪塔が２基と、周辺に数墓があった。２基の五輪塔のうち１基は筆者の背より高く２ｍはあろうかと思う。最古と思われるものは実に４００年以上そこに立ち続けていたことになる。その悠久の時の流れにしばらく呆然とする。宍甘宗仙の墓地についにたどり着いた。しかし羽原氏が大叔父宛の手紙に綴った当家先祖代々七代の墓碑名は周辺には見当たらず、依然宗仙と当家のつながりは謎のままである。

墓石の配置



朝のきり　三年　宍甘Ｍ子

朝早く、起きると、
きりで向こうが見えなかった。
ぎゅうにゅうはいたつの、
おねえさんが、
ぼやーんとかすんで見えた。
ぎゅうにゅうびんの
ガチャガチャという音が、
ぬれているようだ。
おねえさんの黒いかみも
黄色のセーターも
ぬれて光っているだろう。

昭和３４年（１９５９年）1月1日　木曜日　山陽新聞より